

飯能郷土はんおう

第35号



目次

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| ◆飯能市域に関わる近世の組合村について……尾崎泰弘 2 | ◆秋色に彩られた榛名神社を訪ねて……関根貴志 5 |
| ◆文化財情報……坂口和子 2 | ◆狭山茶あれこれ
-緑茶・紅茶・ウーロン茶……内野博司 8 |
| ◆武蔵武士は何故、
天下を獲れなかったのか……西村義司 3 | ◆飯能郷土史研究会の活動……8 |
| ◆「太田道灌と山吹の里伝説」……井上 晃 4 | ◆編集後記……坂口和子 8 |

飯能市域に開わる
近世の組合村について

尾崎 泰弘

●村の連合体、組合村

江戸時代、村(一般的に現在のほぼ大字に相当)は、百姓たちが生活と生産を営む基礎的な集団であった。江戸時代の領主はその村を行政機構として設定した。しかし、18世紀後半になると、個々の村だけで解決できないような問題が出てくるようになる。例えば、中居村(現在の飯能市大字中居)では、文化11年(1814)の12月から翌年12月までの約一年間で何と154人もの浪人が同村を通過した。浪人は、村に対し金銭や止宿を求めたので、治安上大きな問題となった。このとき中居村では一人あたり八文を払うことで対処している(半田家文書「中居村入用帳」)。このような浪人の対応は、村にとっても大きな負担となり、村で連合体を作って対応しようとした。それが組合村である。組合村設置の目的は何か。治安維持・浪人取締に限ったことでもなかった。川除、用水、鷹場、助郷など個別の課題に即し、村は組み合わさる異なる別個の結合をもっているのが普通であった。文政10年(1827)関東に設置された改革組合村もその一つである。こうした組合村は、自治的な性格をもつとともに、その設立の目的に沿った課題に限定されている。だが、公儀の下請機能を担っていたところでは、本市域に存在していた近世の組合村のうち、現在の精明地区の

村などから構成される一五か村の組合村(以下仮に「一五か村組合」とする)の成立とその後の展開について紹介することとしたい。

●一五か村組合の設立

この組合村は、梅原、栗坪、楡木、猿田、野々宮、上鹿山、中鹿山、下鹿山、鹿山、原宿、宮沢、小久保、下加治、青木、中居の一五ヶ村からなる。前半の二〇か村は現在の日高市域に該当する。それ以外の村の領主は別表の通りである。天明2年(1782)3月に設立されたこの組合村は、石高の小さな村であり「当難之時節」に百姓が困窮しないよう、互いにそれを解決するのに必要な費用を高割りで出し合うこととする(半田家二四号文書「取替申組合熟談規定書」)。「当難」時節とは、一つは、「御鷹御用向宿入用」或いは「人馬継」である。そのほか、相互に助け合う事例として規定されているのは、各村内で行倒れ人が発生した場合、病人が病にかかると、病死する、路銀を払い詰めてしまおうといった場合や、浪人が合力を求めて理不尽なことを言い出したとき、火付り盗賊人の到来などである。ここで注目されるのは、この組合設置は所持高の少ない百姓も含めた百姓一統の協議を経て、得心し承知したことが条件になっていた点である。

●鷹匠の通行とその対処

近世では、將軍や大名が鷹狩りを行うための場所として指定された地域を「鷹場」というが、その鷹場には、捉飼場といわれる鷹の訓練のために使われる場所も含まれていた。捉飼場は鷹匠頭が管轄し、年に数回巡回した。

先述の「御鷹御用向宿入用」とは、鷹匠やその一行が宿泊した際にかかる費用のことである。また、「人馬継」とはその移動に関わる人足、馬の足立のことである。それらの費用や人足などは村が負担した。

ところで、この一五か村の近くには、幕府の捉飼場が設定され、入間郡八二か村、高麗郡一二か村がそれに対応する組合村を作っていた。当該地域にも鷹匠の通行があったわけ、実際天明4年(1784)6月22日に鷹匠二人が小久保村、下加治村に宿泊したことがわかっている(半田家九四号文書「覚」)。これに関わる費用は、この一五か村に道添村(額からすると鹿山村のうち清水領知部分と思われる)を加えた一六か村で高割りしている。各村で負担する分は、同28日までに下加治村名主に届けることになっていた。

○組合村の分契

このころが、この規定ができて三年後の天明7年(1787)、新たな添証文書が取り交わされる(半田家九一号文書「取替申添証文書」)。すなわち、この組合の内には鷹匠が通行するルートから遠い位置にある村もあって、御鷹御用の節の人馬に間違えがあった問題は、御鷹御用に対応する村を三年間に限り、御鷹御用に対応する村を限定して割合、出銭することとし、それ以外の場合にはこれまで通り村々一同で相互に出銭することとした、というのである。さらに、三年後には、この組合村の枠組み自体を破談することも合わせて定められている。また、御鷹御用の諸入用出銭は梅原・宮沢の二か村が免除されることと

ふるさと文化財情報

●川寺・大光寺木像虚空蔵菩薩坐像が平成27年3月25日 埼玉県有形文化財に指定されました。郷土はんのう34号でご紹介しました。

有形文化財に指定された市果の指定となった大変美しい尊像です。600余年の歳月を少しも感じさせない、優美な虚空蔵尊は当市の宝です。ご開扉は12年ごとの丑の年、4月13日のみという秘仏です。毎年4月13日、10月13日が例大祭で大光寺は参詣人で賑わいます。

●市内のお雛子の2大流派である「神田大橋流祭りばやし」と「小田原若狭流祭りばやし」が平成27年7月に飯能市無形民俗文化財に指定されました。「下加納子保存会」原町雛子連「が保持団体として認定されました。これで飯能市の有形・無形民俗文化財として、山車、獅子舞い、お雛子が指定されましたので後継者の育成に期待したいと思っております。(坂口和子)



木像虚空蔵菩薩坐像

なつた。反対に諸入用を負担する組が三つ設定された。一つは榎木・野々宮・猿田・上鹿山・鹿山村下分の五か村で小畦川の上流の村々であり、もう一つはそれより下流にある中鹿山村・下鹿山村・鹿山村下分の三か村である。残りでは小久保・高麗丘陵の南側の村に於ける。また、また栗坪・原宿の二か村は、寄合に出てこないで動向がわからず懸念と続けることとされる。協議に加わらぬ二か村の存在や、三年後には一度解散するといふ内容から、当該組合村は設立の目的に対しあまり機能していない様子がかげえる。これ以後この組合村に関する資料は中居村半田家文書中には見られずこの後どうなつたかは定かではない。

[15]村組合の村々の領主

村名	支配
梅原	一橋家
栗坪	久留米藩(黒田家)
榎木	田安家
猿田	田安家
野々宮	榎本而宮家
上鹿山	榎本而宮家
下鹿山	榎本而宮家
鹿山	清水家・榎本而宮家
原宿	久留米藩(黒田家)
栗坪	榎本而宮家
宮沢	久留米藩(黒田家)
小久保	榎本而宮家
下加治	榎本而宮家
青木	榎本而宮家
木居	榎本而宮家
田家	榎本而宮家

●むすびに

なお、文政12年に設置された改革組合村では、一五か村組合の村々は飯能村を寄場とする組合に属している。このうち、中居村は青木・下加治・宮沢・榎木の四か村とともに小組合を形成していることがわかる。しかしそれ以外は当該地域の組合村の様相はほとんどわかっている。その説明は今後の課題である。

武蔵武士は何故、天下を獲れなかつたのか

西村 義司

建久9年12月(1198)、頼朝は稲毛重成の亡妻の橋供養に出た。帰路、落馬。それが元で翌年の正治元年1月(1199)に死去する。53歳であった。幕府創設7年後のことである。

この、にわか頼朝の死は「幕府の籍」を一挙に緩めた。やがて北条政權といふ「新たな籍」が出来るまで、幕府権力を巡って陰謀が渦巻く流血と混乱の世が続いた。頼朝の死と共に頼家が17歳で家督を相続した。政子は頼家の訴訟と裁く能力を危険視した。彼女にとって訴訟を誤れば武家政治そのものを失う、という危機感があった。このため、政子と北条時政は頼朝の死から3か月後の4月、頼家の訴訟独裁権を停止し、時政を首座とする長老による合議制にした。

●比企能員拳兵政死

(建仁3年12003)

二代將軍頼家の外戚は武蔵武士の比企氏だ。頼朝は頼家が生れると能員夫人を乳母とした。その上縁が重なった。頼家が成人してゆくにつれ能員の娘・若狭を寵するようになり、一橋といふ世継も得た。こうして頼朝の死後「頼家を核」として比企氏という新興勢力ができ、一見、北条氏を圧倒する勢い

を見た。ただ、政子の思い込みでは比企氏が頼家を本格的に擁するようにならば頼朝殿の政治理念が失せてしまふという事だ。この頼家が死を予感させる病に

ついた時、時政は頼家の慶嫡を独断で決めた。この事を能員に頼家に報告。頼家は能員に「時政を討て」と密命する。この密議を隣家で政子が聞き、時政に急報する。時政は機先を制し、番師如來の供養の席に参列した能員を謀殺。能員の嫡子宗員は一橋を小御所に擁して抵抗するも共に殺された。

事変後、時政は政所別当(執権)となる。これによって、北条氏は相模の三浦氏、和田氏、武蔵の畠山氏等の有力御家人に対して政治的に著しく優位に立った。

●畠山重忠、二保川で戦死

(元久2年12055)

重忠は遅くに頼朝に属した。が、頼朝の重忠に対する信頼は絶大であった。また、関東武士団の多くから信頼も尊敬もされた。さらに、奥州攻めの時など敵からさえ尊敬された。

事件のキッカケは、牧の方の娘婿平賀朝雅と重忠の嫡子重保との口論である。それを朝雅は妻の母である牧の方に訴える。牧の方は

夫・時政に訴える。やがて畠山重忠に謀反の疑い有りといわれ、事件につながる。

6月22日、鎌倉で俄かに動員令が下された。先ず畠山重忠が由比ヶ浜で殺される。重忠はこの3日前に比企の菅谷館を出発して鎌倉へ向つてた。二保川まで来て一切を知った。すでに眼前に一万の兵が満ちていた。一方、重忠軍は一三四騎。しかも平装である。この平服の団は疾風となって敵一万騎の中に入する。やがて重忠は愛甲季隆の矢で最後を遂げる。この畠山重忠の滅亡をもって、武蔵武士の天下への望みは消滅した。同時に、武蔵国は北条氏のものとなり武蔵武士はその膝下に屈する事となる。

●三浦一族の敗滅

先の重忠が討たれてから8年後に和田義盛が北条義時に討たれる。さらにその34年後に三浦一族が敗滅する。こうして、北条氏は頼朝の有力柱石といふべき武蔵・相模の有力御家人を逐次に各個に潰し、鎌倉政權は北条氏独裁政權へと変質していく。

このように鎌倉幕府の歴史は血なまぐさい。権力には人を狂わす魔力がある。この権力争いは、他を排すため陰謀と武力を用いた中世という時代の仕業なのか。それとも、人間の業の底知れぬ深さの故か。

「太田道灌と

山吹の里伝説」

井上 晃

太田道灌は室町時代後期の武将で、「江戸城の築城」「文武兼備の武将」「山吹の里」の伝説等、開元一円で当時他に類を見ないすぐれた武将でもあり文化人でもあった。

道灌は、江戸城築城で有名であるが、埼玉県の方がはるかに深い絆で結ばれている。

先ず、出生地であるが、伝説とは言え飯能市の隣り町である越生町の龍ヶ谷 龍鶴寺境内の三枝庵の館に、父の太田道真が居住し、道灌が永享4年(1432)に当地で誕生したと伝えられている。

越生町の他に、神奈川県伊勢原市糟谷の館(道灌が主君扇谷上杉定正によって暗殺された館)であるとか、鎌倉市の扇谷上杉氏の館(太田氏の鎌倉における代々の館で、跡地には鎌倉に残る唯一の尼寺として名高い英勝寺がある。)等複数あるが、どの地も確認がなかく定かではない。

次に、「山吹の里」であるが、これまた伝説地が多数あり、一か所に限定することはむづかしい。

越生町の「山吹の里歴史公園」には、観光協会建てた歌碑があり、説明板には、道灌が当地に鷹狩りに来て、俄雨に合い農家に立ち寄り葉を借りようとしたことや

近くには、荒屋が建っているが、地元が「山吹の里」に因んで作られたものであろう。また、東京都豊島区高田の面影橋付近とか、新宿区大久保、大聖院の所とか、他にも数か所ありませう。地理的には、残念ながら越生の地よりも、豊島区、新宿区一帯の方が適地として、当たっているように考えられるがいかがなるのか?

この「山吹の里」で道灌は、少女が出した山吹の意味が解けず、帰城後、家臣より八重山吹は実のないことと、雨具の裏のないことを掛け合わせ、少女の機転の利いた対応であったことや、兼親親王の「七重八重 花は咲けども山吹の実の一つだに なきぞ悲しき」の和歌が基になっていることを知る。その後、道灌は、歌道風雅に精通したとある。併し、道灌の祖父も父も歌道に優れており、その血脈を受けた道灌が「七重八重」の和歌を知らない筈もなく、たまたまその一首が、咄嗟に思い出せなかつたことが口惜しかったのだとする説もある。少女は器量も良く紅血といわれ、やがて江戸城に呼ばれ、道灌の良き歌の友となる。道灌の死後、庵を建て尼と蓋し、大久保の「大聖院」に「紅血の墓」として、区の指定史跡に指定されている。道灌の鷹狩りは、単なる鷹狩りでなく、戦いのための現地視察であり、戦いの臨んで、大いに役立つものと思われ。

太田道灌の銅像については、越

生の龍鶴寺境内にある銅像やら(写真)、川越市庁舎前、江戸築城五百年を記念して、旧都庁の正面に設



越生町教育委員会発行資料より

置され、現在是有楽町の東京都国際フォーラムのガラス張りの中で、江戸城を向いて立っている像がある。また日暮里駅前には、弓を射る姿が勇ましく躍動感あふれる銅像がある。そして新宿区中央公園には、少女が道灌に山吹を差し出す場面、二人の像がある。いずれも山吹の花を手を持つ姿が印象的であり、微笑ましい。

その後道灌は、寛正6年(1465)八代将軍足利義政に招かれて上洛した折、江戸城の居城を「我が庵は松原統統と海近く 富士の高嶺を軒端に見る」と和歌で答えた。また天皇から武蔵野の様子を問われた時は「露おかぬ方もありけり夕方の 空より広き武蔵野の原」と答え、將軍や天皇から、お誉めのことばを賜った。

道灌は、和歌の実力を如何なく發揮した場面であった。まさに、文武両道に秀でた人物である。道灌

はすぐれた戦術家で「足軽戦法」と呼ぶ、弓の一齐射撃による集団戦法を考案し「享徳の乱」「長尾景春の乱」等、東奔西走し百戦百勝を繰り返した。

また、築城については、江戸城、川越城、岩槻城等、太田道真、道灌の父子によって一、二年の短期間に築城した。尚、岩槻城は、太田氏父子によるものでなく、成田正等の築城という資料が発見され新説が出てきている。

道灌の武将としての活躍や、城の修復等をめぐって、上司である両上杉の顕定や定正から、猜疑心目で見られるようになる。道灌が両上杉に対して「謀反の疑いがある」とごん言したことを信じた主君が暗殺したとある。更には、同じ年齢でもあった北条早雲も道灌を無きことにしたい陰謀を企てたとされている。いづれにしても、道灌があらゆる面で偉大な力を發揮したため、最後は、主君の上杉定正によって殺害された。室町時代後期の最初の武人であった。死に当り「当方滅亡」の悲痛な叫び声を残し55歳の生涯を閉じた。時に文明18年(1486)7月26日であった。

乱世に生き、忠義を尽くしたにもかかわらず、主君に討たれた道灌は、過去の武将として、後世の人々から同情を受けている。

これからも和歌や漢詩を通して継承していったらと願っております。

秋色に彩られた

榛名神社を訪ねて

関根 貴志

今年のバス見学は真夏の炎暑を避け、10月17日(金)の実地となった。参加者15名、案内講師は「ぐんまの達人」と認定された角田尚士氏。

●水澤寺

バスは利根川が形成した河岸段丘を登り、どんどん高度を上げてゆく。やがて水沢うどんの店が連なる通りに出ると間もなく水澤寺に着く。ここは坂東三十三箇所所の16番目の札所。ここから仁王門へと石段を登る。

水手舎には珍しい石像がある。水天像である。亀の背に立っているが、亀ではなく竜生九子の子晶扇である。



水澤観音入口の水手場

仁王門は朱の鮮やかな立派なもので、天明7年(1787)竣工。天井に狩野探雲筆の龍が描かれている。探雲は甘栗群野上村(現

富岡市)に生まれ、のちに七日市藩の御用絵師として活躍した人物であり、県内のあちこちの寺社に作品が残されているらしい。境内に残き、六角堂に注目する。ここには三重塔になっており、一階には室永年間の作となる辨物の地藏が六体設置されていて、手押し棒を押して回せるようになってい

る。供養を願いながら左に三回廻すものらしい。長年にわたって多くの人が回してきたためか、手押し棒はだいぶすり減っていた。

六地藏は小伝馬町の鋳物師である宇田川善兵衛が正徳2年(1712)に铸造したものである。墨田区の資料によれば、宇田川姓の鋳物師は中世末期から続く名家で代々小伝馬町に住んでいたという。六角堂は天明7年(1787)に竣工したものである。というから、もともと六地藏は六角堂以前からあり、後から一回転する六地藏という案が出て六角堂を建てたものだろうか。この回転させるための工夫は当時としても珍しいと思われる。

続けて無料展示を行っている釈迦堂へ立ち寄る。此処は「特別無料拝観中」ということだが、平安朝の作になる古いものもあり、本当に無料でもいいのかと思うぐらい多くの貴重な像を間近で見ることができ

●伊香保温泉から榛名湖

10時半頃に水澤寺を出発し伊香保に向かう。間もなく石段街の前

に到着。伊香保榛名道路を通り、高根展望台で停車。遠く赤城から日光、さらに上越国境までの景色が広がっている。角田先生から火山学・地質学の観点からの説明をいただいた。

●榛名山

「榛名山」は単体の山の名称ではなく、榛名湖の外輪山・側火山の峰々を総称して榛名山と呼び習わしている。火山ではこのような例が多いようである(富士山など)。

また榛名山は古くは「伊香保嶺(いかはね)」と呼ばれており、榛名集のころは「榛名」の名称は無かったという。諸説あるが、「厳めしい」または雷の「いかづち」から来ているという説がある。また、六世紀の大噴火を神の怒りととらえ、「いかりのやま」と「保」で呼んだという説もある(「保」は同県内にある御荷鉾山や武尊山のように、山岳名称にあてられる「保」という)。

榛名の名前が記録にあらわれるのは平安の延喜式だが、これは榛名神社の名称であり、榛名神社が今の社地に移ってからだんだんに榛名山と呼ばれるようになったのかも知れない。

●榛名神社

私が此処を訪れるのは二回目となる。前回は水もまだ融けない春の初めて、緑が映え始める頃だっ

たと思う。今回は紅葉が始まって間もないけれどもその色は鮮やかで、隨身門を通りみそぎ橋を渡ると、老杉の下を榛名川の流れを見下ろしながら進んでゆくのだが、対岸のみみじにしばしば目を奪われて歩みはなかなか捗らない。

途中、塩原太助が奉納した玉垣を見る。太助は現在のみみなかみ町に生まれ、江戸で炭屋に奉公へ出た後は長じて大商人に成長した人物で、寛保3年(1743)に生まれ、文化13年(1816)に亡くなっている。

やがて御水屋までたどり着くと、右手に岩を割って流れ落ちる瓶子の滝を見る。ここまでの参道はほぼ直進で勾配も緩やかだったが、ここで本堂に向かって上っていくことになり、我々の視線は上を向くことになる。

神幸殿を過ぎ、双龍門を潜るといよいよ拜殿・本社のある広場へ出る。双龍門では素晴らしい龍の木彫を見ることができ



榛名神社双龍門の彫刻

拝殿の向かいには神楽殿があり、脇に国祖殿と額殿がある。国祖殿はかつて本地仏の勝軍地域を祀っていた建物で、額殿は神楽を拝観するための建物である。拝殿の装飾も大変手が込んだ凄いものである。これは関口文治郎の仕事によるものである。今は年月の経過により色褪せているが、彩色豊かであった頃はもっと素晴らしかっただろう。

文治郎は享保年中に赤城山麓に生まれており、「上州の左甚五郎」と呼ばれるほどの彫物師で、他には妻沼聖天宮、秩父の三峯神社、伊那の熱田神宮、桐生の天満宮や黒保根の衆生神社等にその仕事を残した。榛名神社は最晩年の仕事だったらしい。

伊那からは石工が多く来訪していたのに対し、上州の彫物師が伊那で仕事をしたというのが面白い。どのような交流があったのだろうか。

拝殿の奥は本社となっており、御姿岩に刺さるように建っている。御姿岩は人の頭部と胴体のような奇異な形をしている。幣束は毎年5月1日の未明(丑の刻)に行われる御歳祭神事で取り換えられるとのこと。この神事は氏子にも公開されておらず神職だけで行われるのだという。その奥に御姿岩には洞窟があり、その奥にご神体が祀られているらしいが、立ち入りできない場所とのこと。この日は結婚式が行われていたようで、袴・

白無垢の新郎新婦とすれ違った。記載のある古い神社であるが、もとどまりにあり、物部氏系の部族が居住する里の近くに祖神を祀っていたのだが、やがて山岳修験者によって現在の社地に移されたという(もともとは高崎市箕郷町の榛名神社が旧社地だという)。そして他の社寺がそうであるように神仏混淆の態様となった。

●道祖神

榛名神社を出て道祖神の見学に向かう。田倉潤村地域は道祖神の宝庫ともいえる土地で、街道沿いに多くの道祖神を見ることができ、まず、神明宮の道祖神群を訪れる。ここは国道406号線三ノ倉地域にあり、やや荒れた境内の裏手の林に5体の双体道祖神が安置されている。5体の双体道祖神が分かるのだと享保4年(1719)と天保4年(1833)の二基がある。

ここから一キロほど鳥川を上流に逸つたところに、小栗上野介が新首された河原がある。さらに三キロ半ほど先へ進むと小栗上野介の墓所がある東善寺がある。ここには小栗椿の名で呼ばれる大きな黒椿がある。上野介の道品である鉢植えの椿を植え替えたもので、今も毎年4月に花を咲かせている。続いて落合の道祖神へ向かう。ここは道祖神は交合している姿が有名で、宝暦10年(1760)の銘がある。田倉潤村地域の双体道

祖神の建立については、寛永期、元禄・宝永期、享保期、寛保・宝暦期と4つのピークがあり、時代が下るに従って奔放なデザインが見られるようになっていく。双体道祖神は後期にもなると信仰というより流行の美術品といった側面が目立つようになり、時に奇を衒う様子も見られてくるように感じられる。竹林の中をさらに進むと、陰陽石と石堂がある。陰陽石は陽石と陰石それぞれある。この陰陽石は異形な石がそのまま信仰の対象となっていて、双体道祖神との対比が面白い。続けて中室田の接吻道祖神に向かう。これは宝暦7年(1757)の造立である。信州高遠の石工の作らしい。

このあと下手長の「足踏み道祖神」に向かう。

●長谷寺

最後の目的地である白岩山長谷寺に向かった。ここは坂東三十三箇所第15番札所。本尊は十一面観音で、平安時代中期の作と推定され境内最古ともいわれるが秘仏のため通常は拝観することはできない。

この寺は長く修験道の寺であり、現在は金峰山修験本宗に属している。境内には種々の石造物がある。これまで見てきた道祖神と同様に、伊那高遠の石工の手になるものが多く、面白いのは恵比寿大黒像で、並んで立っている様子はまるで双体道祖神である。

残念ながら、陽が傾き折からの強さを増した風が冷たく、じつくりと見て回る余裕が無かった。16時を少し回った頃に角田先生と別れ、関越道に乗った。夏とは違い、この時間だといふ陽も傾いてくる。高遠を降りたころにはすっかり暗くなっていた。

個人的には、今回の見学は榛名神社およびその周辺にまつわる歴史や、奈良の長谷寺に関心を持つきっかけとなった意義のあるものだった。予備知識を増やして見どころをしつかり抑え、いざ来た再訪したいと思えます。



榛名神社本殿前にて



長谷寺の恵比須大黒像

狭山茶あれこれ

緑茶・紅茶・ウーロン茶

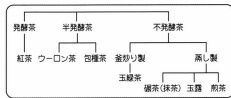
内野 博司

茶の樹の原産地は、現在の中国の南部雲南付近と言われている。日本では、九州・四国から関東地方の山間部に「ヤマチャ」が自生し、利用されてきましたが、現在は、海外から渡来したものであるという説が有力です。

文献上では、中国で約二千年前に見られます。「茶」という文字は、中国唐代に作られたもので、それまで、茶・檳・茗・葭・苑などが使われていました。

日本での利用は、平安時代の弘化6年(815)の文献に見られますので約1200年前までにかのべられますが、一般には、臨濟宗開祖の栄西が著した「喫茶養生記」(1211年成立)が引用され、約800年前からともされています。この頃から、広く利用したものとと思われる、狭山茶の起源である「河越」も産地として知られていました。

●茶の分類
茶を製造方法から分類すると、次のようになります。



煎茶については、省略しますが、いくつかの茶種について説明します。

●玉露

葉の生産方法に特徴があり、摘採する前の茶園に日おおいを1か月くらい行い、日光を制限し、これにより、色が鮮緑・香りは、「おおい香」がでます。また、含有成分も変わってきます。摘採後の製造法は、煎茶とほぼ同じです。

●碾茶

茶葉の生産方法は、玉露のように、茶園に日おおいによって日光を制限します。摘採した葉は、蒸し、その後、乾燥させれば碾茶になります。これを茶臼によって粉にしたものが抹茶です。抹茶の利用は、これを全部飲むわけですから、「食べる茶」ともいえます。

●番茶

一般的には、下級の煎茶を番茶と言っていますが、他の利用法もあって、すでに述べた茶種以外の地方茶を番茶と分類しています。一例では、岡山県北部の美作番茶は、夏に茶を枝ごと刈りとり、大鍋で煮、煮汁とともに乾燥させたものです。碁石茶は、高知果の一部で作られる茶で茶葉を蒸し、桶につけ、発酵させて、3センチほどに切し、乾燥させたものです。

●玉緑茶

摘んだ茶葉を緑色を保つため、

釜で炒って揉んだものが「釜炒製玉緑茶」また、炒るかわりに蒸して、製造されたものが、「蒸し製玉緑茶」です。

現在では、すべての茶種とも製造効率の良い機械製茶ですが、少量であれば、手づくりができます。次に茶種ごとに作り方を説明します。

●煎茶の作り方

①100〜200gの茶を摘みます。摘採時間は30分程度。

②蒸し器で、数回に分けて、蒸します。青臭さが抜け、イモの香りに変わってきます(数分)。なお、電子レンジに80g程度をポリ袋に入れ、1〜2分蒸しても、簡単にできます。蒸すことによって、葉を緑色に保つことが、この工程の要点です。

③もみながら、乾燥させます。(1〜2時間)本格的にはホイロを使いますが、少量的にはホットプレートの上が便利です。最初は、蒸した葉に水分が多いので、水分が減るように軽く攪はんします。水分が少なくなったら、もみながら、乾燥させます。茶の温度は、人肌(36度程度)を保ちます。ホットプレートでは、温度が高くなりやすいので、「保温」にし、時々、切るくらいが適当です。爪で茶が折れるくらいになれば完成です。

④玉緑茶の作り方

①気温が30度くらいの暑い時期が適しています。摘採する茶は煎茶

②蒸し器で、数回に分けて、蒸します。青臭さが抜け、イモの香りに変わってきます(数分)。なお、電子レンジに80g程度をポリ袋に入れ、1〜2分蒸しても、簡単にできます。蒸すことによって、葉を緑色に保つことが、この工程の要点です。

③もみながら、乾燥させます。(1〜2時間)本格的にはホイロを使いますが、少量的にはホットプレートの上が便利です。最初は、蒸した葉に水分が多いので、水分が減るように軽く攪はんします。水分が少なくなったら、もみながら、乾燥させます。茶の温度は、人肌(36度程度)を保ちます。ホットプレートでは、温度が高くなりやすいので、「保温」にし、時々、切るくらいが適当です。爪で茶が折れるくらいになれば完成です。

●紅茶の作り方

の場合よりも、やや硬くなった葉が適しています。摘採量は煎茶の場合よりも少なくて、多いは多くても、製造にはさほど差しつかえありません。

②風通しの良い日かげに摘採葉をうすく広げ、水分を飛ばします。(12〜24時間)これによって、葉はもみやすく、かつ発酵しやすくなります。

③おれた葉をもんで、静置させます。(15〜20時間くらい)この間に発酵によって茶の色は紅色に変化します。

④ホットプレート等で乾燥させれば完成です。方法は煎茶に準じます。

●ウーロン茶の作り方

①摘採は煎茶よりやや硬目の葉を摘みます。

②風通しの良いところでしおらせ(4時間くらい)、この操作によって、独特の香りが発生します。(甘い香り・ランの様な香り等)

③熱したフライパン・中華鍋などで、数回に分けて、葉を炒ります。葉はかきまぜるといふより、鉄の表面に「ジュウ」というまで押しつけ時々攪はんします。熱の通らないところが、注意します。

④フライパン・中華鍋・ホットプレートなどで、もみながら乾燥させます。乾燥すれば出来上りです。皆さんもおためしになってください。

表紙のことは

平成25年に世界遺産に登録された富士山。その人気は海外にも高く観光で訪れる外国人が増加しているとき입니다。

美しい山容は日本人のだれもが誇りに思っているでしょう。富士山に憧れ、撮り続けて40年、終わりの美杉台から見た富士山の勇姿です。場所は朝日山展望公園。左は笠雲のかかった富士の夕景です。

(内野晃延)



飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十六年年度事業報告

▽総会

四月十九日(土)

講演会

「江戸時代・飯能地域の領主と村々」

講師 尾崎泰弘氏

(飯能市郷土館学芸員)

▽例会

六月二十一日(土)

「狭山茶の歴史と試飲」

講師 内野博司氏

(郷土史研究会副会長)

八月二十三日(土)

「飯能四方山話」

講師 浅見賢治氏

(郷土史研究会理事)

十月十七日(金)

「榛名神社周辺の史跡巡り」

講師 角田尚士氏

(飯能市文化財委員)

十月

特別展「機屋の挑戦」

郷土館事業に協賛

十二月十三日(土)

「武威武士はなぜ天下を獲れなかったか」

講師 西村義司氏

(郷土史研究会会員)

平成二十七年二月二十一日(土)

「太田道灌と山吹の里伝説」

講師 井上晃氏

(郷土史研究会理事)

三月三十一日

郷土はんのう三十四号発行

◎平成二十七年年度事業計画

▽総会

四月十八日(土)

講演会「飯能と中山氏」

講師 中藤栄岳氏

(智観寺住職)

▽例会

六月二十日(土)

特別展「機屋の挑戦」について

講師 村上達哉氏

(飯能市郷土館学芸員)

八月二十二日(土)

「飯能の文人・平山蘆江」

講師 高澤等氏

(郷土史研究会会員)

十月十六日(金)

「城外研修」茨城県笠間市岩間町愛宕神社と周辺の史跡」

講師 郷土史研究会

十月

「武威野鉄道開通百周年記念展」

郷土館事業に協賛

十二月十三日(土)

「武威野三十三観音について」

講師 大野邦弘氏

(副会長 竹寺住職)

二月二十日(土)

「城郭の基礎知識」

講師 中上敬一氏

三月三十一日

郷土はんのう三十五号発行

編集後記

戦後70年の節目となる平成27年(2015)は最悪の形でスタートしました。世界中を震撼させたイスラム国のニュース以降、世界中が不安材料に満ちあふれ、心安まる日々は遠くになりました。厳しい寒さの冬でしたが、昨年のような大雪にみまわれることなく、春らんまんの桜の季節をむかえることができるのも辛うじて平和を保つ日本の有難さを感じます。

郷土はんのうも35号まできました。長い道のりでしたが、振りおたし、書きのこりたい郷土の歴史はまだまだ次山あると思います。会員皆さまのお力で、大きな面積をもち自然豊かなこの町の歴史を語り継いでいきたいものと願っております。ご執筆いただいた皆さまありがとうございます。

(坂口和子)

郷土はんのう 第三十五号

発行日 平成二十七年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0034 埼玉県飯能市東町三二一六

(堀越方)

電話九七三二一三三八一

題字 大野邦弘

印刷所 (有)ビー・ユースフル